

特集にあたって

大竹 恒平（上智大学）

近年、生成 AI の急速な普及により、自然言語で問いかけるだけで集計・可視化・文書生成が行われる時代が到来し、データ活用の裾野はかつてないほど広がっている。これらの取り組みは「成果を出すフェーズ」へと移行が進む一方で、AI を導入しても期待した成果が得られないという声は依然として多い。その背景には、AI に渡せるデータが社内に整備されていない、あるいはデータの定義や品質が不統一であるというデータ基盤の課題がある。加えて、分析結果が意思決定や現場業務に結びつかないという問題も多くの企業に見られる。データを組織の共通語とし、あらゆる経営活動に組み込むためには、技術的な知識に加えて、業務への深い理解と現場を巻き込むノウハウが不可欠である。

本特集では、さまざまな分野の企業に所属する著者の皆様から、業務への深い理解とデータ蓄積・活用のノウハウに基づいてデータ利活用や AI を実践した 7 編の記事を寄稿いただいた。

まず、谷古宇啓之氏（WAI コンサルティング合同会社）には、VUCA 時代におけるデータドリブン経営の重要性を背景に、DX の本質を「意思決定・業務プロセス・提供価値の変革」の三段階として整理し、データサイエンスによって人の限界を補完し、組織知を競争力へと昇華させる実践的アプローチを紹介いただく。

甲田直也氏（株式会社レゾナック・ホールディングス）からは、自社における人的資本経営の推進において、従業員体験を向上させるためのデータ活用事例を報告いただく。エンゲージメント調査データに対し、ベイジアンネットワークを用いた因果探索を適用し、従来の相関分析では捉えきれなかった因果構造の可視化と、経年変化を踏まえた施策について紹介していただく。

鬼頭正樹氏・黒須将文氏（都築電気株式会社）からは、データ分析の結果が現場業務へ定着しないという課題に対し、現場起点の伴走型支援サービス「D-VUE® Service」を紹介いただく。企画設計から分析、システム実装、運用定着までを一気通貫で支援するアプローチを提示し、「新人配属先最適化」「不良品検知」「需要予測」などの実践事例について解説いただく。

村田康佑氏（株式会社 NTT データ数理システム）からは、企業内に蓄積される文書やメール、議事録といった非構造化データの活用方法について解説いただく。非構造化データの特徴を整理したうえで生成 AI を用いてメタデータを抽出し構造化するアプローチと、RAG のように非構造化データのまゝ扱うアプローチに分け、実用化で直面する「参照の問題」や評価設計の重要性について、実務的な観点から論じていただく。

渋谷智之氏（株式会社エイトハンドレッド）からは、データ分析が意思決定に結びつかない根本原因について、「問い（イシュー）の設定」と「データ解釈」に着目し、現場の失敗パターンを 6 類型に整理して解説いただく。対応策として、「問いの公式化プロセス」や、「So What?」を軸としたデータ解釈のプロセスなど、分析結果を価値ある意思決定へとつなげる方法を紹介いただく。

小西伶児氏（マネーフォワードホーム株式会社）、佐野夏輝氏（株式会社マネーフォワード）、吉住遼氏（マネーフォワード総合研究所）からは、B2C サブスクリプションサービスにおける売上予実管理を題材に、予測精度と解釈性を両立する KPI マネジメントの枠組みを紹介いただく。「マネーフォワード ME」を事例とし、売上を時系列信号と捉えるマクロ的アプローチと、ユーザー行動の集積と捉えるミクロ的アプローチを統合する二層構造の管理アーキテクチャを通じ、ビジネスサイクルと目的に応じた手法の使い分けを解説いただく。

最後に、安野将央氏（株式会社マクロミル）からは、マーケティングデータの活用を、中長期の「戦略プロセス」と短期の「戦術プロセス」という二層 PDCA として整理し、両者を接続する枠組みについて解説いただく。測定の視点（マクロ/ミクロ）と顧客反応（意識/行動）の 2 軸で効果測定手法を位置づけ、全体最適を促すマネジメント手法を論じていただく。

本特集にご寄稿いただいた著者の皆様と、ご協力いただいた学会関係者の皆様に感謝を申し上げる。本特集が、読者がデータや AI を実務に適用し、新たな価値を創出する一助となれば幸いである。